

この議論は大変面白いし、私もホワイヘッド学会に加わっているわけですが、ひとつここで、あえて論争的な側面を出そうと思います。具体性置き違えの誤謬、Fallacy of Misplaced Concretenessですけれどね、「具体性を間違える」ではないんですよ。具体性が置かれる「場」が間違っているんですよ。ところが今までの議論では、「具体性が何か」という問いと、「具体性がどういう場に置かれて、働いているか」ということの区別を、あまりせずに議論しているような気がします。これはもちろん、混同する問題ではあるんですが、Whitehead 本人にとっては、むしろ具体性というものに対しては、ものすごい信奉感があったと思います。彼は認識論と存在論を最終的には融合することを目指していましたから。逆に、Whiteheadと同じような問題意識を持ちながら、それに対して具現性と言ったのはフッサールです。今述べている「具体性」はフッサールでは個であり、個は偉大と言っていますけれども、無限の先にある。それをリアルとして、我々が現実に使っている場合に、それがどうであるかということに対して、少なくとも理性的なレベルで、理性という有限で処理できるレベルでやっていくときに、具体物があるかという哲学の問題を取ることはもちろんあり得ますが、しかしWhiteheadが述べていること、つまりもうすこし misplaced ということが重要だとすると、その場に置かれて、どういう範囲で働くのか、その具体性は様々な要素を持っていますよね。村田先生、浦井さんのおっしゃった、自己に成り行く、なんて言うんですか、つまり自分自身に創造性のある、フッサールの述べる無限という言い方、新たなものがたくさん入ってくることがある。ある場に置かれることによって、その場の構成の関係によって、置かれたものを規定しますから、そのある種の規定の仕方によって、今言った能力が、こう...スポイルされてしまう。しかしその、スポイルされると感じないからこそ、これだという議論として、misplaced ということが問題になるんだと思うんですよ。逆に言うと、浦井さんが言ったのは、我々がまともなようなXXX (1:50:27)ではなくて、その置かれた状況において、どの範囲までがむしろ背景側の場の方で働いているものとして現れるのか、ということの兼ね合いの問題ではないでしょうか。そこのところをはっきりさせないで、「具体性を何かと間違える」というのは、「対象として間違える」という話と、具体性ということが、はっきり分からなくなる。具体性がそれぞれの関係性による規定において、どういう風に制限されているか。

(村田晴夫先生のコメント：ヒエラルキー、人間-組織-社会-自然という循環関係の中、人間には置かれた場がある。その都度異なる組織に置かれる。その意味で場というものは抜けていないのでは。)

「場」と言ったときにまずイメージしてしまうのは、位置の上に作られた場という形で、位置ということを考えてしまうと思うんですが、そうではなくてむしろ物理学で使った場合に、ある種の...我々は実際に感じていますよね、色々なものを、動的に。これは、物理学の場というものは、単に事態のXXXの方 (1:51:55)であってそれに対してそれを越えた形で、「位置」があるのか、というのは別問題なんです。位置というのはむしろ、まさにそこのところで、どういう形で二つのものに関係しているのかということ、そこにおける例えばXXX (1:52:07)という形を使って、それこそcommerceして、これは数学でいうと割り算をして、同一のものによって関係が集うわけです。その意味では、我々がむしろハーモニーとか言うときに、対照的に置かれている鳥瞰的な形で空間イメージしたものを場と言う、そうではなくて、例えば音の場とか、我々のこの場の雰囲気とか、場の空気といった言葉を使っているときの、我々がお互いに交渉しているという事実としての場ということは、区別して考えるべきだと思います。私は、後者の方の形の、我々が理論的に想定したときに、いわゆる数学的モデルで立ち現れるのかということ。それがどういう風につながっているかということ、むしろ misplace という言葉が、正しく置かれるというのはどういうことなのか。